



柳田邦男の

# 深呼吸

【「生と死」のかたち】

## 遺す言葉と「死後生」

# 「今」

の容体からは、一日単位で考えないといけない段階になっていると思えます。

医師から患者の身近な人々がこう言われた時、どう対処すればよいのか。この秋、私自身が体験したことを記しておきたい。

災害被災者の支援活動に新しい取り組み方を切り開き、災害ボランティア活動の指導的役割を果たしてきた阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長の黒田裕子さんが亡くなった。73歳だった。8月半ばに激しい腹痛に襲われて兵庫県西宮市内の病院に入院したところ、肝臓がんが腹部全体に広がるほど進行していることがわかった。医師は「あと1カ月」と告げた。

黒田さんから、9月半ば近くになって、「お会いしたい」と電話があった。黒田さんは20年来のつき合いだった。

特に阪神大震災の時の黒田さんの活動には、目を見張るものがあった。家族や家を失い、避難生活を余儀なくされた何千何万という被災者を支えるには、組織に縛られない自由な身で全人的なケアにあたらなないと表面的になっ

まうと気付くや、副総長をして病院を退職して、看護の専門性を生かしたボランティア活動家に転身した。そして神戸市の巨大な西神

第7仮設住宅ができた、一角に青アートを張り(後に市に交渉して木造の建屋に)、互いに見ず知らずの入居者たちが引きこもらないように、テントで茶集を出して、憩いと交流の場にすると共に、ボランティアの人たちが孤独死を防ぐための見回りをしたのだ。このスタイルは各地の仮設住宅に広まった。

そうした活動の中から仲間



熊登半島沖地震で避難所暮らしの住民と柔軟体操をする黒田さん(左) 〓右川島輪島市で2007年3月、竹内幹撮影

たちと生み出したボランティア活動の新しい思想を示すキーワードはたくさんある。隙間探し」「最後の一人まで」「何でもありや」「つなぎあわせる」「支えあいの連鎖」などだ。

また多様な活動をする小さなボランティアグループの活動を支援するための寄付金集めをする上部組織として「しみん基金・KOBÉ」を創設するという画期的な活動の中心になったり、災害看護学会創設の中心的な役割を果たしたりと、黒田さんの活動領域は広がるばかりだった。

そして、今回の東日本大震災では、気仙沼市の面瀬仮設住宅の一角に交流の場を設け、仲間たちと24時間態勢で入居者のさまざまニーズに対処する活動を3年以上続けてきた。

# 私

もこの春、2回のべ5日間、面瀬仮設住宅を訪ねて少しばかりお手伝いをした。黒田さんは午後7時過ぎ、ボランティアの学生や若者たちが帰ってくると、円陣形に椅子を並べて座らせ、一人一人にその日の活動と感じた問題などを報告させては、厳しいコメント

や助言をするのだった。特に看護学生には厳しかった。若者を育てないと、社会を変えられない」といつも言っていた。

9月15日に西宮市の病院に駆けつけると、黒田さんは「いろいろ学んできたので、死は怖くない。でもやり残したことがあるのに、時間が無い」とあせりを見せた。

私は率直に言った。「傲慢かもしれないが、黒田さんだからこそ言わせてください。黒田さんがやろうとしている活動は、その思いを知る誰かが継げます。でも黒田さんにしかできないことが残されています。自分の生き方、人生、ボランティア活動のスピリット、次の時代を生きる若い世代へのメッセージなどを語り遺すことです」

黒田さんは、おなかをさすりながら張り上げるような声で語った。「最近の看護の仕事は理論に偏り、ケアの心が薄くなっている。看護を患者中心に変えないと。大事なものは現場です。現場にしか本物はない。現場から解決法を提言していくんです」

18日に飛行機で故郷・島根県出雲市にある島根大医学部付属病院の緩和ケア病棟に移す。

やなぎだ・くにお 作家。次回は10月25日に掲載します。

った黒田さんは、翌日、市内のお寺のお坊さんに来てもらい、戒名のことなどを話し合った。そして夕方、車椅子で屋外に出ると、西の空の雲がピンクから赤く変わり、日が沈んでいくのをいつまでも黙って見つめ、暗くなるまで動かなかったという。

20日午後、私は出雲に飛び、2時間近く黒田さんの語りをノートに記録した。最後に私は「人の精神性のいのちは死後も後を生きる人々の心の中で生き続け、それぞれの人生を膨らませる。それを私は死後生」と呼んでいます」と話した。「いい言葉だ、書いといて」と黒田さんが言ったので、私は出された色紙に筆で大きめに「死後生」と書き、小文字で語った説明を併記し、黒田裕子さんのいのちは永遠です」と書き添えた。

「これはお棺に入れてあの世に持っていきたい」と黒田さんは言った。

2日後の22日から黒田さんは昏睡状態に陥り、24日午前0時27分、息を引き取った。多くの言葉を遺して。合掌。

2014.9.27

やなぎだ・くにお 作家。次回は10月25日に掲載します。